

家持自然詠の「ヨヅ」「攀」

古 館 綾 子

一 はじめに

大伴家持の自然詠に、「ヨヅ」という語が見られる。具體的には「ヨヅ」という形での用例はなく、次のように詠まれている。

① 大伴家持攀橘花贈坂上大嬢歌一首并短歌

いかといかと ある我がやどに 百枝さし 生ふる橘
(中略) 息の緒に 我が思ふ妹に まそ鏡 清き月夜
に ただ一目 見するまでには 散りこすな ゆめ
と言ひつつ ここたくも 我が守るものをうれたきや
醜ほととぎす 暁の うら悲しきに 追へど追へど
なほし来鳴きて いたづらに 地に散らせば すべを
なみ 攀而手折都 見ませ我妹子 (⑧一五〇七)

反歌

② 詠山振花歌一首并短歌

うつけみは 恋を繁みと 春まけて 思ひ繁けば
引攀而 折りも折らずも 見むごとに 心和ぎむと
繁山の 谷辺に生ふる 山吹を やどに引き植ゑて
朝露に にほへる花を 見るごとに 思ひは止まず
恋し繁しも (⑨四一八五)
山吹をやどに植ゑては見るごとに思ひは止まず恋こそ
増され (⑩四一八六)

③ 詠霍公鳥并藤花一首并短歌

(略) 二上山に 木の暗の 繁き谷辺を 呼びとよめ

朝飛び渡り 夕月夜 かそけき野辺に はろはろに
鳴くほととぎす 立ち潜くと 羽触れに散らす 藤波
の花なつかしみ 引攀^{ひきよぢて}而 袖に扱入れつ 染まば染
むとも (19四一九二)

ほととぎす鳴く羽触れにも散りにけり盛り過ぐらし藤
波の花(一に云ふ「散りぬべみ袖に扱き入れつ藤波の
花」) (19四一九三)

④ 二月十九日於左大臣橘家宴見攀折柳条歌一首
青柳の保都枝与治等理^{ほつえよぢとり}かつらくは君がやどにし千年寿
くとそ (19四二八九)

「ヨヅ」が含まれる句のみ、使用された字が判別できる
よう本文のまま示した。『万葉集』中、歌に用いられた
「ヨヅ」は八例のみであるため、参考として家持歌以外の
歌も挙げておきたい。

⑤ 三野連石守梅歌一首
引攀^{ひきよぢて}而折らば散るべみ梅の花袖に扱入れつ染まば染む
とも (19一六四四)

⑥ 献舍人皇子歌二首
妹が手を取而引与治^{とりてひきよぢ}ふさ手折り我がかざすべく花咲け
るかも (19一六八三)
春山は散り過ぎぬとも三輪山はいまだ含めり君待ちか
てに (19一六八四)

⑦ (略) みづ枝さす 秋のみち葉 巻き持てる 小鈴
もゆらに たわやめに 我はあれど 引攀^{ひきよぢて}而 みねも
とををに ふさ手折り 我は持ちて行く 君がかざし
に (19三二二三)

反歌

ひとりのみ見れば恋しみ神奈備の山のみち葉手折り
来り君 (19三二二四)

⑧ 小里なる花橘を比伎余治^{ひきよぢて}互折らむとすれどうら若みこ
そ (19三五七四)

⑦と⑧は巻十三・十四に収められた作者未詳の歌、⑥は
人麻呂歌集歌、⑤は三野連石守の歌である。三野連石守は
家持の父旅人が筑紫から帰京する際の従者の一人で、その
時の歌が巻十七巻頭に載せられている。¹⁾

さて、ここに示したように、「ヨヅ」の表記には「与治
等理(ヨヂトリ)」などの一字一音表記と、「攀」字による
表記が見られる。このうち、④では題詞に「攀」、歌に
「与治」とあり、①の一五〇七番歌では題詞と歌のいずれ
にも「攀」字が使われている。このことから、題詞・左注
の「攀」は歌中の「ヨヅ」と同じ概念を表すために用いら
れた可能性が高いと考えられるため、題詞・左注に見られ
る「攀」の例も併せて挙げておきたい。

⑨ 紀女郎贈大伴宿祢家持歌二首

戯奴がため我が手もすまに春の野に抜ける茅花そ食して肥えませ
(8)一四六〇)

昼は咲き夜は恋ひ寝る合歡木の花君のみ見めや戯奴さへに見よ
(8)一四六一)

右折攀合歡花并茅花贈也

⑩ 大伴宿禰家持攀非時藤花并芽子黄葉二物贈坂上大

嬢歌二首

我がやどの時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が笑まひを
(8)一六二七)

我がやどの萩の下葉は秋風もいまだ吹かねばかくそもみてる
(8)一六二八)

右二首天平十二年庚辰夏六月往来

⑪ 二日攀柳黛思京師歌一首

春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大道し思ほゆ
(19)四一四二)

⑫ 攀折堅香子草花歌一首

もののふの八十娘子らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花
(19)四一四三)

⑬ 見攀折保宝葉歌二首

我が背子が捧げて持てるほほがしはあたかも似るか青き蓋
(19)四二〇四)

講師僧恵行

皇祖の遠き御代御代はい敷き折り酒飲むといふそのほほがしは
(19)四二〇五)

守大伴宿禰家持

⑭ 三月十九日家持之庄門槐樹下宴飲歌二首

山吹は撫でつつ生ほさむありつつも君来ましつつかざしたりけり
(20)四三〇二)

右一首置始連長谷

我が背子がやどの山吹咲きてあらば止まず通はむいや年のはに
(20)四三〇三)

右一首長谷攀花提壺到来因是大伴宿禰家持作此歌和之

ここに挙げたように、題詞・左注に至っては先ほどの①④の例を併せた八例中七例が家持歌であり、残り一首も紀女郎が家持に贈った歌である。こうした「ヨツ」「攀」の用例分布は、この語が家持歌に特徴的な語であったことを物語っている。また、「ヨツ」「攀」は、植物を扱う際の動作を表す語と読めるため、この語を検討することは、家持自然詠が依って立つ自然観を垣間見ることにもつながるだろう。

このような問題意識のもと、本論では家持歌における「ヨツ」「攀」の内実を明らかにしていきたいと思う。

二 「ヨヅ」「攀」の解釈

「ヨヅ」から連想されるものとしては、「よじ登る」や、「振る」の字が当てられる「ねじる・ひねる」の意がある。しかし、上代ではそのような意味での使用例は認められていない。『時代別国語大辞典』によれば「しつかりとつかんで引き寄せる。樹木などを引き折ろうとする」ことで、「【考】には「攀」は万葉では引くという意と解されるところにのみ用いられている。用例を通してみると、引くために物をつかむ・手ぐろうとする・手がかりにしようとしてつかむというような意。現在、よじのぼる意にしか使わないが、これは岩や木の根を引キヨヅつかまえて登る意に由来する」とある。

注釈書類においても、鴻巣盛廣『萬葉集全釋』に、「折攀」の二字は珍しい熟語である。意は折り引くことで、攀ぢ登るのではない。(中略)攀の字は集中に多く用ゐられてゐるが、いづれも木に攀ぢ登ることとは解せられぬもののみである。(中略)攀の字は廣韻に「扳音班挽也、又音攀同扳」とあり攀を扳にも作るのである。國語晉語に「攀輦即利面舍。韋昭注引也」とあり、李白詩に「籍草依流水攀花贈遠人」とあるのも木に登ることではなく、引く又は折ると解すべきである。(中略)攀の字もヨヅという國語も共に、

木に登ることではなく、引く意で、稀に折ることもなるのである。」とあるように、「引く」意とするものが多い。③「稀に折ることもなる」というのは、題詞や左注の例に「攀」が単独で用いられている場合があるためだろう。確かに、①や⑩の題詞では花を「贈」るとあり、贈るためには折ることが必要だから、「攀」字に「折る」意までを含めて捉えるべきという論理は成り立つと言える。

一方、歌の例では、「攀而手折都」「引攀而折りも折らずも」「保都枝与治等理」「比伎余治互折らむとすれど」など、「折る」や「取る」と共に用いられた例がほとんどである。しかし一例、③の四一九二番歌の「引攀而袖に扱入れつ」には「折る」「取る」がなく、歌のことばとしての「ヨヅ」に「折る」意まで含まれているようにも見える。ただ、「扱く」は手でしごき落とす、むしり取る、の意⑤と考えられることや、⑤の用例との関係から、当歌の「ヨヅ」も単に引き寄せる意として解すべきだろう。

「ヨヅ」が「折る」意とは別の概念を持つ語であったことは、②の四一八五番歌からもうかがえる。当歌の「引攀而折りも折らずも」は、引いて「ヨヅ」行為をした上で、折るのか折らないのかはどちらでも良いのだということであり、両者が別の行為として区別されていたと考えることができる。また、「折る」意のみならず、「引く」意とも同義

でなかったことは、そのほとんどの用例に「引く」が添えられていることから明らかである。⁶⁾

このように見てくると、歌における「ヨヅ」には「折る」意を読むことが難しいが、題詞・左注にはその要素も認められる可能性が残り、歌の「ヨヅ」と題詞・左注の「攀」には若干の違いがあると言える。

ただし、このような差異は、「ヨヅ」の表記として「攀」が用いられる過程で、それぞれが持つ意味の広がりや相違から生じた避けがたい差異と考えられ、ここに大きな問題が孕まれているとは考えにくい。両者の差異を検討するより、まずは、なぜ家持が「ヨヅ」「攀」を多用したのかということにこそ注目すべきであろう。

「折る」あるいは「引き折る」だけを表すならば、まさに「引く」「折る」といった表現があるわけだが、それにもかかわらず「ヨヅ」「攀」を用いたのはなぜなのか。それは、「ヨヅ」「攀」が示す特別な概念が歌の表現に必要とされたからにはかならない。おそらく、家持の「ヨヅ」「攀」は、「引く」か「折る」かということとはレベルを異にする問題を抱えているのである。

それを明らかにする手がかりとして、次節では『万葉集』周辺に見られる「ヨヅ」「攀」の用例に目を向けてみたい。

三 『万葉集』周辺の「ヨヅ」「攀」

上代の文献で「攀」と書いて「ヨヅ」と読ませると考えられる例を見ていくと、次のようなものが挙げられる。

すなはち北の海の浜に礫あり。名は脳の礫といふ。高さ一丈許りなり。上に生ふる松、蕪りて礫に至る。邑人の朝夕に往来へるごとく、又、木の枝は人の攀ぢ引ける（攀引）がごとし。（『出雲国風土記』出雲郡）
時に此の神の容貌、正に天稚彦が平生の儀に類たり。故、天稚彦が親属妻子皆謂はく、「吾が君猶し在しけり」といひ、衣帯に攀牽り（攀牽衣帯）、且喜び且働ふ。（『日本書紀』神代下 第九段正文）

時に此の神の形貌、自づからに天稚彦と恰然相似れり。故、天稚彦が妻子等見て喜びて曰く、「吾が君猶し在しましけり」といひ、則ち衣帯に攀持り（攀持衣帯）、排離つべからず。

（『日本書紀』神代下 第九段一書第一）
悪因は轡を連ねて苦しき処に趁る。善業縁に攀ぢて（攀縁）安き堺に引く。（『日本霊異記』中巻序）

『風土記』の例では、高いところに生えている松が礫に至る程繁る様子を、人が「攀引」している如きだとたとえている。『日本書紀』では、天稚彦の喪を弔いに来た味耜

高彦根神の容貌が死者のそれによく似ていたため、親族妻子が喜んで取りすぎる場面に用いられている。『日本靈異記』には、訓釈に「攀ヨチテ」とあり、引用部分は「悪い行いの因縁は轡を並べて苦界に向つてひた走る。善の行いは善縁にすがつて安楽浄土を引き寄せる」意。「攀」の対象は「縁」である。

「引く」意と「折る」意のいずれかといえば、これらの例はいずれも「引く」意で用いられていると言える。しかし、ただ「引く」というよりは、自らの側に「引き寄せる」意が認められる。また、『日本書紀』と『日本靈異記』では、「攀」の対象が死者（実際には死者に似た生者）や縁など、得難いが故に切望される、「攀」の主体にとつて価値あるものであることも興味深い。

次に、『懐風藻』の「攀」を見ていきたい。これから示す六例が全用例である。

A 序 縹藻を攀ちて遐に尋ね（攀縹藻而遐尋）、風聲の空しく墜ちなむことを惜しむ。

B 13 五言。山齋。一首。

宴飲山齋に遊び、遨遊野池に臨む。雲岸寒猿嘯き、霧浦柁聲悲し。葉落ちて山逾静けく、風涼しくして琴益微けし。各朝野の趣を得たり、攀桂の期を論らふこと

莫れ（莫論攀桂期）。

C 39 五言。山齋言志。一首。

間居の趣を知らまく欲り、来り尋ぬ山水の幽きことを。浮沈す煙雲の外。攀翫す野花の秋（攀翫野花秋）。稲葉霜を負ひて落ち、蟬の聲吹を逐ひて流る。祇仁智の賞を為さまくのみ、何ぞ論らはむ朝市の遊。

D 60 五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首。

賓を嘉みして小雅を韻ひ、席を設けて大同を嘉みす。流を鑿て筆海を開き、桂に攀ちて談叢に登る（攀桂登談叢）。盃酒皆月有り、歌聲共に風を逐ふ。何ぞ專對の士を事とせむ、幸はくは李陵が弓を用ゐたまへ。

E 73 五言。扈從吉野宮。一首。

鳳蓋南岳に停まりたまひ、追ひ尋ぬ智と仁とを。谷に嘯きて孫と語らひ、藤を攀ちて許と親ぶ（攀藤共許親）。峰巖夏景變はり、泉石秋光新し。此れの地は仙靈の宅、何ぞ須あむ姑射の倫。

F 90 七言。秋日於左僕射長王宅宴。一首。

帝里の煙雲季月に乗り、王家の山水秋光を送る。蘭を露らす白露未だ臭も催さね、菊に泛かべる丹霞自らに芳有り。石壁の蘿衣猶自し短く、山扉の松蓋埋りて然も長し。遨遊已に龍鳳に攀づること得たり（遨遊已得攀龍鳳）、大隱何ぞ用ゐむ仙場を究めむことを。

A は、先人が為したすばらしい詩文を意味する「縹藻」

が「攀」の対象である。先人の詩が失われてしまうのが惜しく、遙か遠くに尋ねるのであり、先の『日本書紀』や『日本靈異記』の例同様、得難いものをこちら側に引き寄せようとする意と読むことができる。

これと同じ方向性を持つものに、D Fの例がある。Dの「攀」は、長屋王にとりすがって宴に出席し、盛んな談論に参加するというもの。⁹Fについては、「竜鳳に攀ぶ」は竜や鳳にとりすがること、貴人のそばに侍ること。¹⁰という注を参考にすれば、貴人という得難い人物に近づくことを表したといえる。D Fは、自分が近づくことを「攀」と表す例で、引き寄せたい意とは真逆にも思える。しかし、対象を引き寄せるにしてもこちらが近づくにしても、いずれも「攀」という行為の主体がその対象に価値を認め、対象との距離を縮めることを望んでいるのであり、Aや『日本書紀』『日本靈異記』の例との共通性を認めることができる。

また、『懐風藻』には植物を対象とした「攀」の例も見られる。B「攀桂」には「折桂」と同じく官吏の登用試験に及第することや、立身出世の意があるが、『文選』の「招隠士」に用いられた「攀援」と同じく、山中に分け入って桂の枝を引いて賞美するという意に取るべきとの解釈も出されており、今はそれに従って理解しておく。「招隠

士」は山中に住む屈原を招き返す意で、その際、山中で行う所作として「攀援桂枝兮聊淹留。」が二度繰り返されている。桂の枝を引き、しばしその場に休むことを表しているようだ。招隠士の意図は、「山中はしばし留まって桂の枝などを賞美するにはふさわしい場所だが、久しく留まる場所ではない」と呼びかけることにある。ここから、Bの「攀桂」も山中における遊びを表すと考えられるため、「ここに遊べば、一切の趣きを尽くしているので、更に山中にわけ入って桂の枝をよじて遊ぶ必要もない」の意に解せるというのである。この読みに従えば、Bの「攀」は、山斎の遊びと比較されるようなすばらしい遊びの所作をいったものと考えられる。

Cもまた山斎での遊びを詩に作ったもので、「攀翫」は「物にとりすがってそれをもてあそぶ」意である。CはBとは逆に山斎での遊びを「攀」で表し、それが朝廷や市での遊びにも勝っているという。

また、Eの「攀藤共許親」は、その前の「嘯谷將孫語」からの流れで、文才の士として『詩品』にも登場する孫綽と許詢の交わりを述べたものであり、「文人として並び称せられた晋人孫と・許を引き合いに出し、官人達の吉野清遊を描いた」とされる。

このように、B C Eの例における「攀」は、この上ない

遊びの場を象徴的に示す行為と捉えることができるのだが、これは、「攀」の対象である「桂」や「野花」「藤」に価値が置かれているからこそ成り立つ表現である。つまり、自分にとって価値のあるものを引き寄せるといふ意は、これらの例でもその基本となっているのである。

さて、こうした「ヨヅ」「攀」の用例についてまとめるとすれば、次のように言えるのではないか。まず、「ヨヅ」「攀」の主体は、基本的に対象に価値を置いており、「ヨヅ」という表現そのものに対象との距離を縮めることを望む心までが含まれているように読める場合が多い。また、『懐風藻』の例に、価値ある遊びの象徴としての「攀」が見られたが、この前提にも対象そのものの価値化が認められるため、今示した「ヨヅ」「攀」の基本的意義は変わらないのである。

一方、漢籍における「攀」字使用については、中村宗彦氏に詳しい論考がある。¹⁴⁾氏は、『万葉集』の題詞・左注に見られる「攀」は全て「折」と同義と考える立場に立ち、その上で漢籍における「攀」の字義を確認されている。氏はず、字書類に「攀||折」の意を登載したものが無いことに疑問を呈し、「折る・取る」「入る・登る」を加えるべきだと述べる。また氏は、「攀」字の意味の広がりについても触れており、これが大変興味深い。まず、「攀」字の

基本義は「引き寄せる」意であり、次にその行為の結果である「折る・取る」を表す例が生まれてくる。そして、(自分の身に対象を)「引き寄せる」運動を反対から捉えた、(自分の方から対象に)「すがる・とりつく」意が派生し、またその行為の結果としての「入る・登る」の例が現れるというのである。

こうした氏の考えによれば、「攀」字使用にはまず「引き寄せる」「すがる・とりつく」、つまり、ある対象と自らの間の距離を縮めるといふ基本的字義が意識されていたと考えられ、それが状況によっては「入る・登る」「折る・取る」といった意味まで含んだとも捉えられるのである。たとえば、氏が「折る・取る」の例として挙げている中に、次の『文選』の賦がある。

別賦 江文通

桃李を攀ぢて別るるに忍びず(攀桃李兮不忍別)、愛子を送りて羅裙を濡す。

この「攀桃李」は、戦乱の地に向かう我が子との別れの場面における母の動作を表したものが、別れの耐え難き辛さを耐えるよすがとして桃李を我が身に引き寄せているとも読めるし、手折ついているとも読める。¹⁵⁾ いずれにせよ、ここは桃李という対象に「身を寄せ」、我が子を失う辛さを耐える描写として読むべきであり、桃李が折られている

か否かはあまり重要ではないと思われるのだ。

よって、本論では「攀」が「折」の意を含むか否かという問題はひとまず保留とし、「攀」字が基本義として「引き寄せる」意を持つということをおさえておきたいと思う。

四 『万葉集』の「ヨヅ」

前節では、『万葉集』周辺の「ヨヅ」「攀」の傾向について述べたが、ここで再び『万葉集』の「ヨヅ」「攀」に話を戻したい。『万葉集』中で「ヨヅ」「攀」の対象となるのは全て植物である。今、題詞・左注と歌とに分け、その対象を挙げると次のようになる。

〈題詞・左注〉

合歓花 茅花 橘花 藤花 芽子黄葉 柳黛 堅香子
草花 保宝葉 柳条 花

〈歌〉

橘 梅の花 花 もみち葉 花橘 山吹 藤波の花
青柳の上枝

ただし、この中には、植物が女性の喩として読める可能性を持つ例が二つ含まれている。歌の用例⑥⑧として挙げた、一六八三番歌と三五七四番歌である。

まず、⑥では、「取而引与治とりひきよぢ」を導く句に「妹が手を」とある。植物を「ヨヅ」ることと、女性を所有することとが、

連想によって重ねられている¹⁶。また、⑧では、結句に「うら若みこそ」とあり、花橘のような美しい女性を自分のものにしようとしたがあまりに若くてためらわれた、と読むことができる。こうした発想は万葉歌に少なくないものの、「ヨヅ」「攀」が女性の所有をイメージさせる語としても機能していたことが分かる。

このように、『万葉集』の歌の例では、「ヨヅ」が時に女の所有の意を含み持つ場合があり、その裏には第三節で述べたような、「得難いものを自分の側に引き寄せようとする」意に通じるものを認めることができる。やはりこの語は、単に「引く」「折る」ことを意味するのではなく、対象を所有したい、対象との距離を縮めたいという願望をも表しており、それゆえ、植物に女性をなぞらえるような歌にも用いられたのだろう。

しかし、これらはいずれも家持歌の例ではない。では、こうした『万葉集』の歌の傾向が、家持歌の「ヨヅ」「攀」と、どのように関わっていくのだろうか。

五 家持歌の「ヨヅ」「攀」

家持の歌の中で「ヨヅ」が用いられているのは、冒頭に載せた①から④の四例であった。①は、大嬢に一目見せたいと思っていた橘をほととぎすが散らすので、もう他に方

法がなく「攀而手折」つたとある。②では、この世に生きる人として恋の思いが尽きず、春がやってくる物思いも募るため「引攀而」山吹を見ようというもの。③は①に似ており、ほととぎすが散らす藤の花を「引攀」るとある。

④は橘家の宴にて主人の「千年」を寿ぐ「かづら」として、青柳が「与治等」られている。

④だけは宴の歌であり、少し異質な場での作歌と考えられるため、まずはこの歌から見ていきたい。当歌で「ヨヅ」の対象となっているのは「青柳」である。ただし、それは単なる「青柳」ではなく、宴の主人の繁栄が永遠であるよう寿ぐための「かづら」としての「青柳」である。ここで「ヨヅ」が用いられているのは、得がたいが故に切望されるものとして青柳を讃めるためだろう。

さて、問題は残りの三例である。これらには全て、よく似た状況がうかがえる。①と③の「ヨヅ」が、いずれもほととぎすによって散らされてしまう花に對する行為として詠まれていることは既に述べた。

①では「ただ一目 見するまでには 散りこすな ゆめと言ひつつ」とあるから、本来の望みはそのままの橘を大嬢に見せることだったと分かる。最終的に橘の花は折られて贈られたようだが、歌の表現を見る限り、当初からそれが目指されていたとは読めないのだ。詠み手の心は眼前の

橘の維持を望んでいるのであり、当歌における「ヨヅ」は、そうした心による行為としておさえられるべきである。

③でも、ほととぎすが藤を散らすという内容を受けて「引攀」る動作が詠まれている。花を散らされ姿を変えていく藤を自分の袖に入れ、せめて今のこの色だけでも袖に留めようという趣旨なのではないか。①や③の詠み手の本来の望みは、良い時期の橘や藤をそのままの姿で留め、賞美することにあるのだと言える。花を折り取って鑑賞したりかざしたり、相手に贈ったりすることではないのである。

②の歌では山吹が移植されているのだが、その意味も同じ観点から捉えることができる。谷辺の山吹を庭に移植するのは、谷辺で出会った山吹の一部を折り取ることは満足しない心ゆえである。移植とは、対象ををそっくり自分の所有物にしたいという思いに導かれた行為である。当歌が「折りも折らずも」と詠み、折ることにあまり価値を置いていないのも、おそらくこのためである。我が庭に植え、我が身にその花を引き寄せて楽しむことができれば、折るか折らぬかは問題ではないのだ。むしろ、折ることはこの歌にとつては忌むべき行為でさえあつたかもしれない。

①でも「攀而手折」るのは、あくまで「すべをなみ」という状況に置かれたためであり、「攀」という行為は、今ある状態のまま対象を自らに近づけたいという衝動の表

れと読める。しかしその結果、結局「手折」ることになるため、ここでの「ヨツ」と「折る」も、一見同義のように見えてしまうのだ。

ここまでの考察により、家持の歌の「ヨツ」にも、対象に価値を認めて引き寄せる意を認めることができた。また、特に①②③の例からは、家持歌における「ヨツ」は、「折る」とは対照的ともいえる意味内容を持たされる場合があり、むしろそちらの方が用例としては多いことが明らかに became だったのである。

六 自然愛好の心と「ヨツ」「攀」

本論の目的は、家持歌が植物への行為として「ヨツ」「攀」を用いた意味を明らかにすることであった。そして考察の結果、家持の歌に用いられた「ヨツ」には、対象に価値を認めて引き寄せる意が含まれていること、また、「折る」とは対照的ともいえる植物のそのままの姿をとどめたいという心が認められる例が多いことが明らかとなった。

特に、家持歌①②③の「ヨツ」は、自らの行為が「花を惜しむ心」に導かれた結果であることを説明した語と捉えることができる。たとえその花を「折」ったのだとしても、その行為を導いたのは、今日の前にある花の姿が失われる

ことを惜しむ心なのだ。

題詞・左注に「攀」が多用されたことも、おそらくそのことと関わっている。題詞には「攀」と「贈」が同居するものもあるため、やはり結局は折るのだろう。だが、そこに「折」ではなく「攀」を用いたのは、その行為の裏の心までをも表現しようとしたからではないか。

そして、そのような心は、「懐風藻」の例に見られた、自らの遊びを至高のものと自負する者達の心ともつながっている。家持の「ヨツ」「攀」にも、自分の行為が自然愛好の心から導かれた高度なものであるという自負が見出せるのではないか。

以上本論では、家持歌の「ヨツ」「攀」が、「折る」とは置き換えがたい深みを持つ語であることを明らかにしてきた。その二者の違いとは、「心」を描き出せるかどうかという点にある。このことから、自然に向き合う詠み手の「心」を描き出そうとする家持自然詠の特徴をあらためて確認することができたのではないか。今後さらに題詞・左注の「攀」についての考察を深めるため、漢籍の用例についても詳しく検討していくつもりである。

注

(1) 父旅人との接点から、⑤も家持周辺の例として考えた

い。

- (2) 中村宗彦「万葉集詩文訓詁管見」〔『萬葉集研究』第十六集 塙書房 一九九八〕は、その用例の多さから、「よづ」に「攀」字を宛てたのも家持が初めてであったのではないかと推測する。

- (3) たとえば他に、次のような解釈が見られる。

・「窪田評釋」「攀ぢ」は、當時は引き寄せる、又は折るの意で用ゐられてゐた語である。

・「武田全註釋」攀は、下から上を引く意の字で、引き寄せる意に使われている。

・「全注」巻第九（金井清一）つかんで引き寄せる意。

（中略）現代語の語感にあるやや強引な感じはなかったと思われる。しつかりつかむ程度の語感であろう。

・「全注」巻第十四（井手至）しつかりと掴んで手繰り寄せる意。（中略）ここの題詞（一五〇七番歌 ※古館注）の場合は、引き寄せて折る意まで含めて表わすか。

・「伊藤釋注」つかんでひつばる意。

- (4) 前掲2の中村論文は、『万葉集』の題詞・左注における「攀」は全て「折」の意であるとする。これに対する本論の立場は論文後半に示す。

- (5) 伊藤博『萬葉集釋注』十。また、本居宣長『萬葉集問抄』（『本居宣長全集』巻六巻 筑摩書房 一九七〇）にも、「袖ニコキレツとあるコキは、コキマゼテ、コキタレテ等のコキと同じく發語ならんとおもはるれば、袖

にいれつといふ程の詞と聞ゆ、さらは持なら「枝ながらカ」袖に入れたるにや」とある。

- (6) 前掲2の中村論文は、歌の「ヨツ」は、「折る以前の動作」であり「引く」と同義でないことから、「取り方を曲げる、たわめる」意と捉えている。「力を入れて対象」と同義ではないという点においては、本論も同じ立場を取るのである。

- (7) 新編日本古典文学全集『日本靈異記』の訳文による。

- (8) 字義としては「美しい詩文」を指す。

- (9) 日本古典文学大系『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』の頭注による。林古溪『懐風藻新註』も「立派な人につられての意」とする。

- (10) 日本古典文学大系『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』の補注による。

- (11) 前掲10に同じ。

- (12) 大野保『懐風藻の研究』による。他の註釈書では動物の猿と親しむ意とするものが多い。

- (13) 前掲12の論を受けて書かれた日本古典文学大系『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』の補注による。

- (14) 前掲2に同じ。

- (15) 新釈漢文大系『文選』（賦篇）下の通釈では「桃李の木に寄りかかつて別れに耐えきれず」と訳されており、語釈には「すがりつく」とある。

- (16) 渡瀬昌忠「人麻呂歌集非略体歌における戯笑性」〔国

語国文』三八卷三号 一九六九・三、真下厚「人麻呂
歌集『献舍人皇子歌』考」(『立命館文学』四三五・四三
六合併号 一九八一)などに詳しい。

(17) ⑤の三野連石守の歌では「ヨツ」ことと袖に「扱き入
れ」ることが連動しておらず、家持歌との違いが見られ
る。家持が「ヨツ」を歌に詠むようになったのは、ある
いはこの歌の影響かもしれないが、その用い方に差異が
表れているということは興味深い。

(18) 高松寿夫「万葉歌の表現と漢詩の表現―特に身体所作
にかかわる表現をめぐって―」(別冊アジア遊学『日
本・中国 交流の諸相』勉成出版 二〇〇六)は、漢詩
の身体的所作には和歌のそれとは異なり、主体の心境を
象徴するはたらきを有するものが多く、そのことが漢詩
の叙情詩としての本質的な部分を支える大きな役割を果
たしたと述べている。家持の「ヨツ」「攀」を、こうし
た漢詩的表現を目指したものと考えることもできるだろ
う。

※本論は、平成十八年度上代文学会大会(五月二十一日)で
の口頭発表に基づいたものである。席上諸氏より貴重なご教
示を賜ったことに深く感謝申し上げます。